

フランス語の一般性と文学テキストの特殊性

日本フランス語学会第 343 回例会

2023 年 6 月 24 日 (土)

東北大学・川内南キャンパス・文化系総合研究棟 (教育学部) 11 階・大会議室

発表者 青木三郎 (筑波大学)

本発表では、フランス語の言語構造・機能の一般性 (la généralité) と表現の特殊性 (la singularité) の関係について考察する。フランス語学研究では、フランス語の特定の事象 (des faits particuliers) の観察を通じて、そこから抽象できる一般性のある特性 (les propriétés généralisables) を形式化する。また抽象化した特性から、個別の事象の複雑性を再発見する。それに対して文学テキスト (作品) は、フランス語にその作品でしか表すことのできない個性を与える。したがって文学テキストからフランス語の例文をとる場合、その例文は、フランス語としての一般性の個別の現れであると同時に、作品の個性の一部であるという二重性を考慮する必要がある。

この前提に立って、本発表では具体的に *Voyage au bout de la nuit* (セリーヌ『夜の果ての旅』) (1932) と、*Le Petit Prince* (サン=テグジュペリ『星の王子さま』) (1943) (及び *L'Étranger* (アルベール・カミュ『異邦人』) (1942)) で用いられている冒頭の複合過去形について考察する。この 3 作品はいずれも冒頭が複合過去形であることが特徴的であるが、各作品における複合過去形で表される表現価値は異なっている。

(1) Céline : *Voyage au bout de la nuit*

Ça a débuté comme ça. Moi, j'avais jamais rien dit. Rien. C'est Arthur Ganate qui m'a fait parler.

(2) Saint-Exupéry : *Le Petit Prince*

Lorsque j'avais six ans, **j'ai vu, une fois, une magnifique image** dans un livre sur la forêt qui s'appelait *Histoires vécues*. Ça représentait un serpent boa qui avalait un fauve. Voilà la copie du dessin.

(3) Albert Camus : *L'Étranger*

Aujourd'hui, maman est morte. Ou peut-être hier, je ne sais pas. J'ai reçu un télégramme de l'asile : « Mère décédée. Enterrement demain. Sentiments distingués. » Cela ne veut rien dire. C'était peut-être hier.

(1)は語り手 (= 主人公) が無理矢理に出来事の展開に引き摺り込まれるニュアンスがある。その解釈がどのようにして成り立ち、複合過去形とどのように関わるのか。(2)は語り手の少年時代の経験を表すが、複合過去形はすべて内面の出来事に深

く関わっている。その関わり方はどのようなものなのか。(3)の複合過去形は、不条理文学の代表例だが、(1)-(2)の考察との比較で、より明らかになる側面は何か。

作品における複合過去形の価値は、少なくとも、(1) 語り手の出来事の展開に対する立ち位置、(2) 語り手の内面という主観的出来事との関わり、(3) 語り手の存在自体の価値が問題となる。発表当日はこの問題を掘り下げ、「フランス語の一般性と文学テキストの特殊性」の問題に向き合いたい。